
狐火の館

玉響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐火の館

【Nコード】

N3986V

【作者名】

玉響

【あらすじ】

永い時を生きてきた狐と、それに気に入られた少女。
夏に始まり夏で終わる、彼女の恋の物語。

● 終点。

とある年の夏。

絶え間なく響く蝉の声が感じる暑さを倍増させる中、少女は一人黙々と坂を上っていた。

汗は止まることなく頬を伝い落ちているが、それを拭いてもせず、少女は一点を見つめた歩を進める。

言いたいことが体中で渦巻いていた。それに後押しされるように、急勾配にも関わらず彼女の歩みはどんどん速くなっていく。

怒ったようなのどこか泣きそうな、鋭く吊り上った彼女の眼に映っているのは、その坂の上に建つ一軒の豪勢な日本家屋だった。坂を上がりきり、歩みを緩めることなくずんずんと音が鳴りそうな勢いでその屋敷に近づくと、躊躇うことなく門をくぐり、庭を通って。

声をかけることも呼び鈴を押すこともなく、そのままの勢いで引き戸を引いた。

「そろそろ来る頃やと思てましたよ」

そんな彼女とは対照的な軽く涼やかな声が、開け放った玄関を通って少女の耳に届く。

三和土たたきの向こう、和服を着た青年が待ち構えたように立っていた。少女は睨み付けるように青年を見据えると、後ろ手でまた勢い良く引き戸を閉める。その様子に青年は苦笑した。

「もうちょっとお淑やかにしたらええのに」

「そんなの、あたしの勝手でしょ」

暑さのせいかわかに掠れた声の、無愛想な返事。
それを聞いた青年は元々細い目を更に細めると、

「おいで」

そう言って踵を返した。

その後ろ姿を睨み付けるように見つめたまま。滲んできた涙を無造作に腕で拭くと、少女は青年の後を追った。

それは、少女が十八歳を迎えた年の夏のことだった。

● 終点。(後書き)

夏からはじまり夏で終わる物語です。八月から連載を始めようと思っ
ておりました。

壹、少女。

朝比奈梓あさひな あすなというちょっと変わった名前なで、誰に聞いても「普通」と答えられるであろう見た目の少女。それがあたし。

母方が代々力ある霊能力者一族で、あたしの祖母も母も叔母もそしてあたし自身も、ばっちりその恩恵を受けている。お陰様で、あたしのこれまでの人生は波乱万丈だった。

視える視える。生きている人間以上に死んでいる人間が視えるなんてこともある。

しかも、ただ視えるだけではすまなかった。

変に強い力を持つて生まれてしまったらしいあたしは、霊達にとつて美味さと効力を兼ね備えた格好の餌だったのだ。

修学旅行で上った天守閣から突き落とされかけた。

（犯人はその城で殺されたお殿様だったとか）

信号待ちしていたら後ろからトラックの前に突き飛ばされかけた。

（その交差点で死んだ人のお仲間仲間にされるところだった）

脱走した動物園のライオンが商店街の向こうから真っ直ぐこっちに走ってきた。

（これはもうわけがわからない）

嘘のような本当の話。

そうやってあちこちに傷や痣や話題を作っていた時。

一族一の能力者（で、ついでに美貌とずば抜けた頭脳と抜群の運動神経を持つ、天は何物与える気ですかと聞きたくなるような存在）である叔母の巴ともえさんに、全ての原因を説明された。

自分がなんでここまで霊に襲われやすいかが解つたと同時に、当然ながら怖くなって一晩泣き明かしたのは良い思い出だ。今となつては。

ここで、あたしは人生の選択を迫られた。このまま霊に対して知らん顔を決め込むか、修行し能力を磨いて霊と真つ向勝負できるようになるか。

巴さん曰く、ある程度修行すればそこそこの霊能力者になれるらしい。

「それならやらなきゃ損じゃない。何もしないまま喰われるなんて癪だ」

そんな感じの負けず嫌いを全面に押し出した理由で、あたしは巴さんに弟子入りすることを決めた。

そして、十六歳、高校一年生。その年の、夏。

あたしは、その後の人生を変える出会いを果たす。

貳、狐火。

夏真っ盛りなその日は、終業式だった。明日から夏休み。目に見えて浮かれている学生共。……ふっ。

「あたしには地獄の特訓が待ってるっつーの……」

そんなわけで少々やさぐれた心境のまま帰路についていたあたしが見つけたのは、ふよふよ頼りなげにただよう人魂だった。

「珍しい……」

思わず独り言がこぼれ出るくらいには、珍しい光景。

大体の人魂は夜に浮かぶ。それは夜が彼岸に直結しているからとも、太陽の光が人魂を消してしまうからとも言われている。

尚も漂い続けるそれを眺めている内に、ふと違和感を覚えて立ち止まった。

珍しい以外に、何かがおかしい。でも何がおかしいかわからない。その微かな違和感の正体を見極めようと、揺れ動く人魂の後についていった。

ふわふわとゆっくり、しかし確実に移動していくそれを意識を集中させて追いかける内に、とある坂を上り、一軒の屋敷の庭の中に入り込んだ。

そのことに気づかないまま、どこまで追いかけても変わらず判然としない違和感に苛立って、いつそ捕まえたら判るんじゃないかと

手を伸ばしかけた瞬間。

「それは、触ったらあかんで？」

唐突に声をかけられた。

慌てて振り返り、たっぷり三秒間、眼が合う。

そうして、着物を着た男の人の姿を認識して、初めて自分が屋敷の中に入ってしまったことに気がついた。

ところで。

巴さんと一緒に暮らし始めた日から散々言われてきたことがある。それは「坂の上にある屋敷には近づくな」ということ。

理由は教えてもらってない。聞いても教えてくれないのだ。「近づいても理由を聞きたがっても許さん」といわんばかりの威圧感を前に食い下がるなんて自殺行為あたしにはできない。

そして現在。

あたしはその屋敷に近づくどころか勝手に入り込んだ挙句、家主（と思われる青年）に声をかけられている。

ここまで恐らく五秒程度。ようやく状況を理解した瞬間、ざっと血の気の引いた音を聞いた。

そんなあたしを、その人は微笑を浮かべたまま見ている。

「えっと、あの、ごめんなさい！」

パニックになった頭はごく普通の解決法を使おうと思ったらしい。言葉が口から飛び出していた。

謝れば何とかなるんじゃないかという、淡い期待。そしてそれは甘いともいう。

「何が？」

そんな甘い期待は一瞬で砕け散る。当たり前だよな、そうだよな。

「えつと……不法侵入？　みたいなの？」

自分の首をしめている気がするぞ。

「うん、まあ、そやねえ」

あたしの心境とは対照的な、緊張感のまるでないあっさりした返答。

これは霊障がどうこう以前に、法的にまずいんじゃないのか。

情けなさど諸々に対する怖さでへたり込みかけた時、突然青年が笑い出した。

「ごめん、ごめん。そないになるまで虐めるつもりやなかったんよ」

そう言いながら涙が出るほど笑っているその人を前にして、あたしはいよいよわけが判らない。

何故、爆笑されなきゃならん。

全く理解できていないあたしを尻目に、一通り笑ったその人は。

目じりにたまった涙をふき取りながら、ふわりと微笑んだ。

「今のは、狐火やから」

「きつね、び」

「そう、狐火。狐が操る火。……こんな風に」

言うなり、その人の指先に何の前触れもなく炎が灯った。

それは見たことのないような色でゆらゆらと揺れ、灯った時と同

様に前触れもなく消えた。

「きつね……って、え」

冷や汗が背中を伝う。

そんな馬鹿な。だけど、目の前で。

肯定と否定が頭の中でまわりまわっているあたしを眺めながら、男の人は笑みを深めた。

そうして。

「おかえり、お嬢ちゃん。不用意に狐と関わるもんやないで？
…な、”梓ちゃん”」

あたしの、名を呼んだ。

そこから一瞬間だけの記憶がない。

が、どうやら恐怖とか色んなものが限界値に達したあたしの脳は、逃げるという選択をしたらしい。

気づいたら、坂道を全速力で駆け下りていた。

式ノ裏、言葉。

「…………性質が悪いな」

梓の姿が見えなくなった後。物陰に潜んでいた弾筈ひしやうが声をかける。

「何のことや？」

神無かんなは梓が走り去った道を見つめたまま、微動だにしない。

「狐火使って呼んだんは、お前やろう」

「…………何のことやろうな」

「…………縁作りおって」

苦々しげに吐かれた言葉に、神無はそのまま少しだけ声を上げて笑った。

「縁なんて昔からあったわ。」

「なあ？」

夕日は、背後の山の向こうへ静かに沈んでいく。

そのひかりにあぶりだされた己の影を見、神無は口の端を歪めて声もなく笑う。

そうして次の瞬間にはいつもの笑顔に戻し、踵を返した。

「明日来る。冬芽ふゆめ、用意頼むわ」

「別に良いけどな」

空中に放った言葉に、庭の中で一際大きな木の上から返答が降ってきた。

「本当に来るの？ 俺嫌だよ、頑張ったのに誰も来ませんでした、とか」

「来る」

「……今度は言霊でも使う気か」

「ちやうよ」

弾筈の言葉を、苦笑交じりに否定する。

「経験を踏まえた予想やね。あの娘こやったら、ほんまは今日にでも乗り込んできそうな勢いやろう？」

神無の問いに、弾筈は唸っただけで返事をしない。

「そういうわけで。冬芽、桜里おつりと一緒にプラス二人分用意頼みます」「ま、良いやわかった。腕によりをかけて作ってやるよ」

そのまま消えた気配に微笑みながら、神無もまた、屋敷の中へと姿を消した。

参、変化。

西日が容赦なく射す中、坂道を全速力、一気に駆け下りた。家の前についた頃にはもう太陽は山の向こうへ隠れていたけど、その全速力のお陰であたしは局地的豪雨にでも遭遇しましたかと訊かれそうなくらい、びしょびしょだ。

シャツもスカートも鞆の持ち手も、汗のせいで皮膚に張り付いて気持ち悪い。

「とりあえずお茶……その後お風呂……」

ふらふらしながら家に入ると、居間に巴さんの姿があった。いつものように座椅子によっかかり、漫画片手にポテチ。ご飯はきつと用意されていないな、うん。

あたしの気配に気づいたらしい巴さんは漫画に目を向けたまま口を開きかけ……こつちを見て一瞬固まった。

「梓……それどうした」

「え」

険しい顔で言われるまま、指差された場所を見る。

二の腕の内側、見慣れない

「……痣？」

「……梓。坂の上の屋敷に入ったな？」

「……」

「答えなさい」

「すみませんでした」

隠してもどうしようもないので、素直に謝った。
誤魔化しでもしたら洒落にならない事態に陥るのは目に見えてい
るんだよ……。

下げた頭の上で巴さんが溜息をついたのが聞こえた。そして。

「それは狐の印だ」

「き、つね」

「簡単に言えば嫁候補として目をつけられたってことだ」

「きつね………へ？」

じわじわ言葉の意味が頭にしみこんで、反応が遅れた。
狐らしいひとには確かに会ったけど！

「狐の嫁ってつまりはあの人の嫁候補ってこと!？」

「やっぱり当主に会ったか……」

「……やっぱりあの人当主なんだ……若かったけど」
「人型の見た目なんてあてにならない」

言いながら、巴さんは一瞬躊躇う素振りを見せた。

そして。

「お前はもうこの家で暮らしていけないな」

正直、商店街のど真ん中でライオンに遭遇したとき以来の衝撃で
したとも。

「え……それじゃあたしは!」

「あいつの元へ行くしかない」

「そんなのやだよ!」

「……あたしにできることはない」

「そんな、」

「あたしにもわからないんだよ!」

返ってきた言葉は、予想外のものだった。

「……巴さんにも、わからない……?」

思わず訊きかえしたけど、今度は言葉を返してはくれない。

「……もう寝ろ」

一言そう言っただけで巴さんが部屋へ戻っていくのを眺めながら、あたしは立ち尽くしていた。

巴さんは、頭も運動神経も良くて力が強くて、あたしの知らないことも訊いたら何だって教えてくれた。何となく巴さんなら全てを解決できると思っていたんだ。それが覆されたのは大きな衝撃で、もうあたしは抗う術を失ったんじゃないか、とか。

色んなことがぐるぐる頭のの中を廻って、結局、その夜は一睡もできなかつた。

肆、不安。

んでもって次の日の朝。

重い目を一生懸命開きながら居間に行くと、珍しく和服をきっちり着こんだ巴さんが待ち構えていた。

(和服に限らず巴さんが朝からきっちりしているのは珍しい)

「……………どしたの」

「梓も、これ着て」

わたされたのは見たことのない柄の和服。だけど。

「……………着方がわかりません」

「はあ」

溜息一つ。

「やってあげるから。……………できるだけ覚えて」

「おばさ」

「なあに？」

効果音がつきそうなほど綺麗にっこり笑顔を向けられて、慌てて言い直す。

「巴さんこれは一体どういふことでしょうっか」

「……………良いから覚えて」

その後は何を訊いても、無言を貫き通された。
そうしてあたしに着物を着せた後、巴さんは外に出るようにつ

た。
「どこに行くの？」

「……………狐火の館」

「狐火……………」

『狐火。狐が操る火。……………こんな風に』

あの人の言葉が蘇る。

説明がなくても、どこに行くのか理解できた。

「もうここには帰ってこれられないのかな……………」

「……………立ち寄ることを禁止するような奴じゃないとは思っけど」

巴さんが舌打ちをする。

「とりあえず、向こうに着いたら全部説明するし……………させるから」

その言葉に冷や汗が流れるのを感じながら、頷くしかなかった。

伍、突撃。

そして現在。狐火の館、門前。

巴さんは何も言わずに、そんなに力をこめなくてもと言いたくなるような勢いで呼び鈴を押した。壊しそうだ。

軽く涼しげな音が鳴って、少しして玄関の開いた音。そして門が開き、昨日見た顔が現れた……と、同時に。

巴さんが手を振り上げていた。

バチン！ という音がして、おばさんの舌打ちが聞こえた。思わず瞑っていた目を開くと、そこには巴さんのビンタを腕でガードしたその人の姿。

再び舌打ちをした巴さんが腕を引くより早く、その人は開いた手で巴さんの腕を掴んでいた。

そしてにっこり笑うと。

「相変わらずお転婆やなあ、巴ちゃんは」

「お前にちゃん付けされる謂れはない」

片方は笑顔、片方は怒った顔で睨み合いが続く。見ているこっちが竦みそうな光景だ。

と、突然その人の目がこちらを向いた。思わず身体がびくつとなる。

「やっぱり彼女、巴ちゃんの親戚の子なんやね」

「いけしゃあしゃあと。手え離せ」

さて、巴さんという人はですね。
多少口調でも判るんじゃないかと思うけど、そこらの男性より漢おとこらしくて、少々がさつだ。

美人でスタイルも良い上に勉強も運動もできて（あ、料理は致命的に下手です）、それに加えて力が強い。

空手だの柔道だの剣道だの、武道を何だかんだと修めている（らしい）。
だけ。

その巴さんが、相手の手を振り解けずにいる。

その、意味は。

「もう打ぶとうとせえへんね？」

「……ちっ」

その人は舌打ちを了承ととったらしい。

ようやく腕が離されて、巴さんはこれ見よがしに着物を叩く。

その姿を見ながら、その人は涼しい顔。

「いつまで門のところにおる気や」

不意に、その人の後ろから更に背の高い人が顔を出した。

あたしはまたびくつとなつて…我ながらびびりすぎだと思う。

「驚かせたらあかんやろ、弾筈」

ひしょう、と呼ばれた背の高い人は、その人を見下ろす格好でじろりと見て。

「お前が言うな」

巴さんと弾笙さんの言葉が重なった。

そのことで二人は一瞬だけ目を合わせて。

なんとなく不自然な感じでお互いに逸らした。

「……？」

わけがわからないあたしに、全てわかったような顔をして笑っているその人は。

「ごめんな、お入りな」

そう言って踵を返した。

陸、交錯。

通されたのは、小さめの和室だった。

部屋の真ん中に置かれた机と、四つの座布団。

入り口を背に、あたしと巴さんが横同士。

あたしの前にその人、その隣に弾笙さんで机を囲む。

「自己紹介が遅れたな」

そう言うと、その人は微笑んだ。

「僕はとうばらんかな。『董』の『原』つぱに『神』様が『無』いと書くんや」

空中にすらすらと文字を書きながら説明してくれる。そして続ける。

「こっちは上沫弾笙^{うえまつひししょう}。漢字は……ちょっとめんどくさい感じやからまた今度本人に聞いてな」

そう勝手なことを言われているのに、弾笙さんは腕組みをして目を閉じたまま動かない。

「さて、そちらさんは？」

「あ、あたしは……」

「お前の茶番に付き合っ気はない」

ペースにのせられて思わず自己紹介しかけたあたしを遮って、巴さんが口を開いた。

目はまっすぐにその人……董原さんを睨んでいる。

「全部識しっているだろう。……人の真似事か」

「こつえらい長いこと人間と接してるとな、感化されるもんやで」

挑発めいた言葉を、するりとかわしていく。

巴さんが苦々しげな顔をする。

また、笑顔と怒った顔の睨み合い。

今度は弾笙さんも知らん顔を決め込むらしい。

あたしの番かと、密かに腹を括る。

「あの」

「何？」

巴さんに向いていた笑顔のまま、こつちを見る。

少し、怖い。

だけど。

「全部、聞きにきました。知らなきゃどうにもできないので」

そう言つと、董原さんは少しだけ驚いた表情になった。

「えらい冷静やね。ほんならまあ……まず、君が何を知ってるか知りたいところやなあ」

またさっきの笑顔。

自己紹介の時と何も変わらない笑顔のはずなのに、今はどこか薄ら寒く、胡散臭く感じるのは何なんだろう。

そんなことを頭の片隅で考えながら、あたしは昨日巴さんに聞いたばかりのことを話した。
そうしたら。

「嫁候補か！」

董原さんはそう言うとおかしそうに笑い出した。それはもう、すぐくおかしそうに。要は出会った時と同じ爆笑だ。

董原さんの笑いと比例するように巴さんの怒り度合いが増しているのを真横に感じながら、冷や汗が流れる。怖いんですけど！

「そないな説明されたら、そりゃ身構えるわなあ……門前で怯えられた時はどないしようかと思ったけど」

滲んだ涙を拭って、まだ少し笑いながらの説明が始まった。

「その痣は、要は狐がその人を気に入った印みたいなもんなんよ。まあ判つてると思うけど、僕が『狐』で、君が『その人』ね」

くるくると指を動かしながら、説明は続く。

「やから別に嫁候補ってわけやないよ。性別関係ないしね」

「……この痣がある人間はどうなるんですか」

「印をつけた『狐』の元に来る。来るしかない。“盗られた物”があるからね」

「とられたもの？」

「まあ簡単に言えば、」

董原さんはそこで一旦言葉を切ると、巴さんを真っ直ぐ見てにっこり笑った。あ、またボルテージが……！

「魂の一欠片、かな」
ひとかけら
「…………え？」

バン！

突然の音に一瞬硬直して、慌てて横を見ると、巴さんが机を平手で叩いた格好のまま董原さんを睨みつけていた。怒りが頂点に達したらしい。……火がつくってわかってやったような気がするぞさっきのは。

「さっさと返せ」

「嫌や」

身を乗り出した巴さんに、董原さんはそっぽを向いて即答。それがとても子供っぽくて、巴さんの神経を更に逆撫でする。

「え、あの、魂って!?!」

とつとつ董原さんの胸倉を掴んだ巴さんを抑えながら、弾笙さんに視線を向けると。

弾笙さんは一つ溜息を吐いて、口を開いてくれた。

「その名の通り、お前が認識している通りの“魂”や。欠けている状態では生きてくことができへん」

「じゃあ、つまりあたしはここにいないと、」

「こいつが返さん限り死んでしまっ、つうことやな」

「やから巴ちゃんは君をここに連れてきたんや」

再び話に入ってきた董原さんの言葉に巴さんを見る。

董原さんの胸倉を掴んだまま、苦虫を噛み潰したような顔をして

いた。

「巴ちゃん性格と能力やったら、君を家に閉じ込めて一人でこ
乗り込んできたかったやろなあ……梓ちゃん、昨日一瞬記憶飛ん
でない？」

「あ……」

すぐに思い当たった。

狐火を見た直後、坂道を駆け下りる直前。その、一瞬。

「ごめんな」

その言葉に、反射的に董原さんの顔を見ると、少し申し訳なさそ
うな顔をした彼と目が合った。

こういふ表情は初めて見た……なんていう場違いな感想が浮かぶ。
「どうしても梓ちゃんにはここにおってもらわなあかん事情があん
ねん……まだ説明できる時期やないけどな」

後半の言葉は、巴さんに向けられたものだった。

「何の説明もされてへんのも、昔からそれが納得できてないのも理^わ
解^かしとる。やけど、もうちょっとなんや。な？」

「~~~~~っ!」

宥めるような言葉に、渋々ながらも納得したらしい巴さんは、苦
虫を噛み潰したまま乱暴に董原さんの着物から手を離れた。

そのまま、真っ直ぐに睨みつける。

「その時”が来たら必ず全部話せ！ 良いな！」

董原さんは着物を直しながら、巴さんの言葉に緩やかに微笑った。

漆、落着。

そうして何とか巴さんが落ち着いてから、少しの間無音が続いた。黙って着物を整えている董原さんと、相変わらず目を瞑ったまま腕組みしている弾笙さん。

何かもう色んな負の感情が入り乱れてるのがこっちにまで伝わってくる巴さんに、怖くて容易に口を開けないあたし。

だけどそろそろこの沈黙も怖くなってきたよ……！ 誰か喋ってお願いだから……！

「さて、と」

そんなあたしの祈りが届いたのか（そんなわけないか）、着物を整え終えた董原さんがそう呟きながら立ち上がった。

そのままあたしの横を通って、襖を開けて。

「冬芽ー」

誰かを呼んだ。

「はいよー」

反応はすぐに返ってきた。返事と共に、ぱたぱたと廊下を走る音。そのままひよこつと顔を出したのは、あたしと年齢が近そうな少年だった。

「何？」

「話終わったから、料理頼むわ」

「お！ほんとに来たんだ！良かったー！」

突然彼がこっちを向いて、ドキツとする。

「神無は来るって自信満々だったけどさー俺心配で。来てくれて良かったよ」

そう言うてにっこり笑うと、またぱたと廊下を駆けていった。人懐っこそうな人だ……。

「今のは城部冬芽。……字はまた後日、本人に聞いてな」

名前の字まで知る、は董原さんの癖なんだろうか。と、ふと思う。

「今の冬芽と、米居桜里よねいおうじって子が料理作つとるから。勿論、二人の分もな」

その言葉は明らかに巴さんに向けられたものだった。巴さんが微かに唸る。

「……食ってき。落ち込むんは神無そごやなくて冬芽と桜里や」

弾筈はじはねさんのその言葉で決まったらしい。巴さんは溜息をついて、ぼつりど。

「わかったよ」

そう、呟くように答えた。

捌、準備。

「神無さん」

図ったようなタイミングで、再び廊下を走る音と一緒に、今度は女の子の声が廊下から聞こえてきた。

「はいはいー？」

「用意ができました」

顔を覗かせたのは、さっきの少年と同じくあたしと年齢の近そうな少女だった。

「お二人もこちらへどうぞ」

「あ、どうも……」

「いえいえ」

立ち上がるうとしたらその子に手を差し伸べられた。

思わず手を取りながらお礼を言うと、にっこり、という擬音語がぴつたりな、可愛らしい笑顔を向けられた。

……うん、わかってる。あたしにはきっとできない笑顔だ。

「さ、どうぞ」

彼女の先導で辿り着いたのは、めちゃくちゃ広い畳張りの部屋。テレビ（時代劇ね）でしか見ないような綺麗な絵の描かれた襖に、これまたテレビで見るような豪華な食事の乗った御膳。

それが、ひいふうみい……全部で六つ。一つはいわゆるお誕生日席で。

「ここが僕やねん」

そう言っつて、董原さんがその席に座った。

「一応、当主。やからね」

「……偉そうに」

巴さんをからかって遊ぶのは、どうやらこの人の元々の性格らしい。

巴さんの毒づきで背筋を冷や汗が……。

「お好きな所座って下さいね、お客様なんですから」

そんな二人に構うことなく、案内してくれた女の子はそう言っつて奥へと引っ込んでいった。奥からは微かだけどさっきの男の子の声もしている。

察するに、『冬芽くん』と『桜里さん』なんだろう。

「っと、ちよつとごめんよ！」

そんなことを考えながらぼんやり入り入り口で突っ立っていると、冬芽くん（勝手に呼ぶ事にした）が杯の乗った少し大きめの御膳を持ってきた。

「あ、ごめん」

反射的に謝りながら避けると、冬芽くんはそのまま部屋の真ん中

を突っ切り、董原さんの前へその御膳を置いた。
いつの間にか、料理の乗った御膳は横へ退けられている。

「梓ちゃん。おいで」

突然声をかけられてびくつとした。

思わず巴さんを見たけど、巴さんは董原さんを睨んだまま。

弾笙さんはと探すと、董原さんのすぐ近くの御膳の前に座っていた。

「……はい」

渋々、という感じが溢れてるんだろっとなあと自分でも思うような歩き方で、董原さんの前まで行く。

「そこ座って」

指されたのは杯の乗った御膳の前。つまりは董原さんの向かい側。何となーく嫌な予感がしていたあたしにその的中を教えたのは、董原さんが後ろから取り出した小さな刀だった。

「はっ！ えっ？ えっ！？ それっ小太刀ってやつですか！？」

「そうやけど別に慌てんでもええよ」

完全に腰が退けたあたしに苦笑しながら、董原さんは迷い無くその刃に自分の人差し指を当てて……滑らせた。

「え、ちよっ」

慌ててるのはあたしだけで、巴さんや弾笙さんはおるか、冬芽く

んと桜里さんでさえ微動だにしない。

皆が見ている中で、董原さんは自分の指を伝う血を一滴、杯の中へと落とす。

「はい」

そうしてわたされたのは杯……ではなく小太刀の方。

「えっ」

「やることはわかるやる？」

わかりますけどやりたくありません！……は通用しなさそうなのが空気から読み取れたので（空気が読める子！）。

仕方なく、左手で小太刀を持って右手の人差し指に刃を

「あ、そっちやない」

寸でのところで止められた。

「えっ」

「痣がある方の人差し指に小太刀当てて」

痣がある方、つまり左腕。

「えええ……」

利き手なんですけどーという抗議も意味がなさそうだ。

渋々小太刀を持ち替えて、言われた通り左の人差し指に刃を当てた。

そして。

「……っっ」

刃を引きすぎたらしい。

予想以上に深く切れて思わず顔を顰めていると、董原さんが何も言わずにあたしの左手を引っ張った。

その反動で一滴血が落ちる。それは綺麗に杯の中へとけていった。

「はい良くできました」

そう言うてにっこり笑う董原さんは、あたしの手を掴んだまま更に引っ張って。

「あの、もう良いんでしたら手を」

離して下さい。

そう言い終わる前に。

人差し指に、熱さを感じた。

玖、誓約。

熱い。何が起こったのかわからない。ただ熱さを感じる。
そうして、手元をよくよく見てみれば。

「熱い……っというか痛いです痛い！」

徳利に指を突っ込まされていた。

中に満ちているのが水じゃないことは年齢的に縁のないあたしでも匂いでわかる。

そして現状を把握した瞬間に押し寄せる痛みが……！

「日本酒は消毒に使えるって言うからなあ」

「それは聞いたことありますけど！ だから痛いつてば沁みるー！
！！」

のほほんと言いながらもあたしの手を掴んだままの董原さんと、
何とか振り払おうとするあたしの応酬は。

「……ふざけるなああああー！」

キレた巴さんの飛び蹴りによって強制的に終了した。

「びびびびっくりしたっというか沁みる！」

思わず叫びながら、徳利から引き抜いた（未だに血が滲んでる）
指をどうしようかと悩んでいたら、いつの間にか桜里さんが横にい

て。

「説明不足で申し訳ありません」

まるで彼女の落ち度かのようにそついうと、持っていたタオルでそつと指を拭ってくれた。

「あ、血が」

「構いませんわ」

即答で、またにつこり。……男の子じゃなくてもドキドキする笑顔だ。

「……はい。できました」

拭ってくれた上に絆創膏まで巻いてくれて、終わるとすぐに冬芽くんの横まで戻っていった。

……ちよつと残念な気がしたのはきつと気のせいだろうそうだろううん。

「さて、続きええかな」

その声に再び前を向くと、さっきまで巴さんに胸倉掴まれていた董原さんが、につこり笑う。

……この胡散臭さはなんだろう。何でこつも桜里さんの笑顔と違うんだらうか。

そんなことを考えながらも一度御膳の前に座ると、董原さんも姿勢を正して座り直した。

「多少予測はできてると思うけど……」

そうしてわたされたのは、今度こそ御膳の上の杯で。

「はい。飲んで」

血、が混じったであろう透明な何かが杯の上で揺れている。

「未成年なのですが……」

「大丈夫、お酒やないよ。お酒はこっちだけ」

一応言ってみると、董原さんはさっきまであたしが指を突っ込んでいた（突っ込まされていた）徳利を軽く振るってみせる。

「杯のは裏の山に湧いてる水やから、年齢制限は関係ないよ?」

再びにっこり。……うん、やっぱりどこか胡散臭い。しかし。

「……………」

それなら腹を括るしかないのか。

ぐっとお腹に力を込めて、一気に呷るつもりでいたら。

「あ、僕の方も残しといてな」

「……はい」

……もう一度お腹に力を込めて。杯を受け取ると、目を瞑って軽く傾けた。

予想していたよりもずっと嫌な味はしない。むしろ。

「……甘い？」

「湧き水の味やね。杯頂戴」

「あ、どぞ」

正直力の入れ損な気もしたけど結果オーライか。

董原さんが水を飲んでるところを碌に見ないでそんなことを考えていたら、突然体が軽くなった、ような気がした。

「……ん？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3986v/>

狐火の館

2011年10月8日15時56分発行